

演題名：採卵鶏のマレック病とリンパ性白血病の病理学的検討

発表者名：○仁平真由美 大場三緒子 森河隆史

発表者所属：中央食肉衛生検査所

## 1. はじめに

食鳥検査において、肉眼的に肝臓及び脾臓の腫大と白色結節性腫瘍病変を示した場合マレック病(以下MD)またはリンパ性白血病(以下LL)として全部廃棄されている。

両疾病の鑑別において、これまではブロイラーはMD、採卵鶏はLLが多く発生するとの認識が一般的であった。当所でも日齢を参考に肉眼的および病理組織学的診断を行ってきたが、H21年4月に採卵鶏においてMDを疑う症例を認めた。そこで今回、採卵鶏においてリンパ性の腫瘍性病変を認めた検体について肉眼所見および病理組織所見を検討したので報告する。

## 2. 材料および方法

H21年4月～H22年1月に当所管内A廃鶏処理場で肝臓及び脾臓の腫大と灰白色結節を認めた540-900日齢の採卵鶏18羽の肝臓、脾臓、心臓、肺、腺胃、腎臓、皮膚及び坐骨神経を材料とした。これらを常法に従いHE染色を行った。また、LLを疑った1検体について抗鶏Bu-1マウスモノクローナル抗体(SouthernBiotech社)、抗ヒトCD3ラビットモノクローナル抗体(ニチレイ社)により免疫染色を行った。

## 3. 結果

肉眼検査では肝臓は正常から約4倍まで腫大し、灰白色結節は砂粒状を呈するものが18検体中11検体であった。脾臓はすべて直径2cm以上に腫大し、白斑を認めた。また坐骨神経の腫大が3検体、皮膚の結節が1検体で見られた。病理組織検査ではすべての肝臓のグリソン鞘に囲管性に浸潤する腫瘍細胞を認め、うち14検体は大小不同のクロマチンに富む核を持つリンパ球様細胞と少量の偽好酸球、組織球等を認めた。他の4検体は均一な中型のリンパ球様細胞で構成されていた。脾臓では中心動脈周囲に腫瘍細胞の浸潤を認めた。肉眼的に病変を認めなかった腺胃、腎臓、肺及び心臓でも高率に腫瘍細胞の浸潤が確認された。坐骨神経の神経束間や皮膚の羽包上皮周辺にも浸潤が見られた。LLを疑った検体の腫瘍細胞は免疫染色でCD3陽性、Bu-1陰性であった。

## 4. 考察

両疾病は全身にリンパ性の腫瘍性病変を形成し、特に肝臓、脾臓及び腎臓で高率に確認される。しかし、MDでは末梢神経及び皮膚の病変形成がみられるのに対してLLでは見られず、腺胃、肺及び心臓の病変出現率はMDでは高くLLでは低いとされる。また大小不同の腫瘍細胞の増殖はMDに特徴的な所見である。腫瘍細胞の形態、出現臓器から17症例はMDと診断した。MD腫瘍細胞はT細胞由来、LLはB細胞由来であるが、LLを疑った1検体は免疫染色の結果よりT細胞由来であった。以上から18検体すべてMDと診断した。また今回、肉眼所見で異常が見られない臓器にも腫瘍細胞の浸潤が多数確認されたことから、両疾病を鑑別する上で病理組織学的検査を行うことは重要だと思われる。採卵鶏でのMDの発生は散発的であったが、飼養期間が長くその間感染源となり、産卵率の低下等の生産面における影響からも食鳥検査における類症鑑別は重要である。